

第一ペトロ書のキリスト讃歌における救済理解について

著者	花咲 一利
雑誌名	研究論集
巻	72
ページ	135-149
発行年	2000-08
URL	http://doi.org/10.18956/00006383

第一ペトロ書のキリスト讃歌における救済理解について

花 咲 一 利

I. 序

新約聖書の中には、パウロ書簡を中心にして多くの讃美歌、いわゆる「キリスト讃歌」が散在していることはよく知られている。これらのキリスト讃歌は、それぞれの讃歌を持っていた教会共同体のキリスト理解や信仰告白となっている。これら讃歌の成立に至る過程・宗教的背景や目的などは、さまざまであるが、讃歌を担っていた人々のキリスト理解において、多くの共通点を見いだすことができる。以下にそれぞれの讃歌における、キリストに関する共通概念を示す¹⁾。

	コロ1	ヘブ1	ヨハ1	フィリ2	テモ3	ペト1	ペト2	ペト3	エフェ1	エフェ1
キリストに関して										
先在	1,15	1,3a	1,1.2	2,6a		1,20a			1,4	
創造における仲介	1,16	[1,2c]	1,3							
創造の保持	1,17b	1,3b								
受肉	1,19		1,10.14	2,6b-7	3,16					
					A α					
受難		1,3c	1,11	(2,8)			2,21f.	3,18a	1,7a	
十字架の死(死)	1,20a			2,8			2,24a	3,18b		
復活	1,18b				3,16			3,21		1,20a
					A β					
高挙		1,3d		2,9a				1,20b		
昇天					3,16			3,22a		
					C β					
和解=救済 (顕現として)	1,20b					<u>1,20b</u>	<u>2,24b</u>	<u>3,21a</u>	1,10a	
すべての名にまさる名		[1,4]	(1,12)	2,9b						1,21
力による服従		[1,6]		2,10f.				3,22b		1,22a
天使		[1,4]			3,16			3,22b		
					B α					
主				2:11						
宣教(教化)					3,16			3,19		
					B β C α					
教会(かしら)	1,18a								1,10b	1,22b
教会(キリストの体)					(3,16)					[1,23a]
(満ちている場)					(C α)					[1,23b]

これらキリスト讃歌のうち3つは、ペテロの手紙一（以下、第一ペトロ書）の中、1、2、3章にそれぞれ収められている。そしていずれもその中に救済理解を持っている点が特徴といえる。この救済 *σωτηρία* は、第一ペトロ書における主題の一つであり書簡中、繰り返し述べられている²⁾。しかしながらこの第一ペトロ書にはキリストを救い主 *σωτήρ* と告白する箇所はなく、二世紀の別の著者のものとはいえ繰り返しキリストの称号として *σωτήρ* を用いる第二ペトロ書のキリスト理解³⁾とは異なっている。すなわち第二ペトロ書の時代には、周知のキリスト称号となっていた *σωτήρ*⁴⁾を、この第一ペトロ書の著者が用いていない点において、著者が採用した3つキリスト讃歌との共通したキリスト理解を示しているのである。なおキリスト讃歌においても、キリスト称号として救い主 *σωτήρ* を用いる箇所はなく、わずかにフィリ2：11において「イエス・キリストは主 *κύριος* である」と告白するのみである⁵⁾。キリスト称号の問題において、キリストによる救済論を述べるこの第一ペトロ書のキリスト讃歌は、重要な位置を占めていると考えられる。

ここでは第一ペトロ書の3つのキリスト讃歌を取り上げて、それぞれの讃歌の救済理解を探求し、それら讃歌の第一ペトロ書における意義・位置付けなどについて検討していきたい。またかつてこれらの讃歌は本来関連していたのではないかと考えられていたが⁶⁾、この点についても比較検討したい。

第一ペトロ書は、パウロ書簡との関係も深く⁷⁾、また第一ペトロ書のキリスト讃歌と他の書簡の讃歌群とが関連するキリスト理解も多くみられる。これらを比較検討することで、第一ペトロ書の3つの讃歌の背景や中心テーマである救済理解を解明し、またこれらを採用した第一ペトロ書の成立過程などについても知ることができると考える。以下において、この第一ペトロ書における3つのキリスト讃歌をそれぞれ検討していきたい。

II 一ペトロ書1：20のキリスト讃歌について

2章と3章のキリスト讃歌を検討する前に、1章に収められているキリスト讃歌について述べておく。それは1：20の小さな讃歌であり、かつては1：18-21までの範囲をキリスト讃歌と考えた研究者もいたが⁸⁾、これら全体は讃歌形式でも詩文でもなく、また文体も統一性のないものであり⁹⁾、1：18-21全体はともキリスト讃歌とはいえない。ただその中の20節のみが、讃歌形式を持つキリスト讃歌であると考えられる¹⁰⁾。

(キリストは、) 天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、

この終わりの時代に、[あなたがたのために] 現れてくださいました。

προεγγνωμένου μὲν πρὸ καταβολῆς κόσμου¹¹⁾
φανερωθέντος δὲ ἐπ' ἐσχάτου τῶν χρόνων [δ' ὑμᾶς]

この1:20のみギリシア詩文の形式を留めている。それは無冠詞で用いられる2連の初めに置かれる分詞（*προεγνωσμένου*¹²⁾ - *φανερωθέντος*¹³⁾）によって特徴付けられる。ギリシア詩作、とりわけキリスト讃歌において、しばしば連の初めに分詞（たいていはキリストの行為を示すため、完了かアオリストの分詞）を置くことがあり¹⁴⁾、この2連もその詩作に倣ったものである。またこの20節の前後には、分詞は見られない¹⁵⁾。それは20節の2連を1:18-21の中から讃歌として、他の節から分離させるものとなっている。さらに20節には主語（たいていはキリスト讃歌と同様、「キリスト」を補うが）も、また分詞の主動詞にあたる語もないが、このことも新約聖書に採用されたキリスト讃歌の一つの特徴を示している。なおこの2連には、相反接続詞 *μὲν* ~ *δὲ* が用いられており、明確な *Parallelismus* を形成している¹⁶⁾。この相反接続詞 *μὲν* ~ *δὲ* は特にキリスト讃歌において多用されている¹⁷⁾。後述する第一ペトロ書3:18のキリスト讃歌の *Parallelismus* においても、同じ相反接続詞 *μὲν* ~ *δὲ* が用いられている。そしてこの1:20でも、1, 2連を並行させて詩文を作るために相反接続詞が用いられており、キリスト讃歌の特徴を示している。

〔あなたがたのために、*δὲ ὑμᾶς*〕の句だけは、あなたがた（二人称複数）で述べる書簡の文体と一致させるために、第一ペトロ書の著者によって付加されたものと考えられる¹⁸⁾。それは1:5で「あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために・・・守られています。」と述べられている内容との一致を考えてのことである。すなわちこの終わりの時（時代）に現れる方キリスト=救いであることを述べて、書簡の理解とキリスト讃歌の理解を整合させ、示そうとしているからである。

以上のことから、この1:20は小さいながらも2連からなるキリストの先在と顕現を持つキリスト讃歌であると考えられる。しかしキリスト讃歌としてキリストの先在と顕現しか述べられていないことから讃歌の断片とする立場もあるが、この小さな讃歌には神の計画における「黙示的模範」が述べられており¹⁹⁾、これのみでキリスト讃歌を構成していると考えられる。またこの「先在と顕現」は、過去と現在の対比のモチーフでもあるが、この理解は初期の教会では広く普及していたキリスト理解であり²⁰⁾、またこの理解は特にパウロ書簡の中に散在しているキリスト理解でもあった²¹⁾。

それらは奥義 *μυστήριον*、計画（業）*οἰκονομία* などの用語で特徴付けられる「啓示されるキリスト」理解であり、このIペト1:20のキリスト讃歌と同様の理解を示しているものである。（ロマ16:25-26, Iコリ2:7, 10, エフェ3:5, 9-10, コロ1:26, IIテモ1:9-10など）それらのうち成立時期が第一ペトロ書と比較的近い、エフェソ書とコロサイ書の例を以下に示し、検討したい。

まずエフェソ書では、救いの前提として「選び」が強調されている。すなわち、エフェ1:4「世界の始め以前に（新共同訳では、天地創造の前に）*πρὸ καταβολῆς*

κόσμου, 神はわたしたちを愛して、御自分の前で κατενώπιον²²⁾ 聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいて選ばれた」と述べて

エフェ 1 : 10 a 「時が満ちるに及んで、救いの業 οἰκονομία²³⁾ が完成された。」

エフェ 3 : 5 「それ（計画、奥義） μυστήριον はキリスト以前の時代には人の子らには知らされていませんでしたが、今や νῦν “霊”によって、キリストの聖なる使徒たちや預言者たちに啓示されました。」

などと記して、キリストの計画（奥義）の先在性とその啓示=顕現が明示されている。また同様のキリストの顕現理解は、Ⅱテモ 1 : 9-10にも繰り返されているが、これはⅠペト 1 : 10以下で「救い」について預言者たちが探求し、注意深く調べたという報告と同様の理解を示している。一方コロサイ書では、計画が明らかにされる時、顕現の時が問題とされている。

コロ 1 : 26 「世の初めから ἀπὸ τῶν αἰώνων

代々にわたって ἀπὸ τῶν γενεῶν 隠されていた、

秘められた計画 μυστήριον が、今や νῦν、神の聖なる者たちに明らかにされたのです。」

これらエフェ 3 : 5、コロ 1 : 26においては、計画、奥義が明らかにされる時、啓示される時を、「今 νῦν」としている点が重要である²⁴⁾。また第一ペトロ書の著者も 1 : 12において「それらのこと（啓示）は、…今 νῦν、あなたがたに告げ知らせており」と述べて、第二パウロ書簡との同時代性を示している。一方、この第一ペトロ書に採用された 1 : 20のキリスト讃歌では「この終わりの時代に、ἐπ’ ἐσχάτου τῶν χρόνων」と、より現在的な終末論になっている。すなわち、このキリスト讃歌の時間理解においては、第二パウロ書簡のような切迫した時間理解が希薄になっていることは確かである。しかし一方第一ペトロ書の著者の時間理解には、1 : 12の啓示の現在性を示す理解は述べられるものの、切迫した終末理解はやや後退している。「あなたがたは終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために…守られている（1 : 5）」という理解などは、この 1 : 20のキリスト讃歌の終末理解に近いものとなっている。

この小讃歌が第一ペトロ書に採用されたのは、簡潔ながらそこに述べられる「先在と顕現」で示されるキリスト理解が、キリストの顕現=救済理解を持つ書簡の考えと一致したためであろう。特に「終末時」の救済理解は、このキリスト讃歌と第一ペトロ書の著者との共通した救済理解であり、この第一ペトロ書の三つのキリスト讃歌のうち小さいながらも、最も著者の救済理解に近いものとなっている。同時にこの讃歌ではキリストを、創造の時から終末に至るまで、始めから終わりまで-救済史のうちに位置付けようと意図していると考えられることができる。それはこの第一ペトロ書が著された90年代の終末理解とも深く関わっているのではないか。

Ⅲ 一ペトロ書 2：21-24のキリスト讃歌における「救済」について

この2章のキリスト讃歌は、韻を踏んだ対句などから、礼拝式文、とりわけ信仰告白文と考えられている。かつて、H. Windisch らは2：21-25を「キリスト讃歌 Christuslied」と考えたが²⁶⁾、25節は第一ペトロ書の著者による付加である。その理由は、この讃歌が本来一人称複数形の信仰告白であり、この25節はイザヤ53：6のLXXのテキスト「わたしたちは(皆)羊の群れ πάντες ὡς πρόβατα²⁶⁾」を下敷きにしなが、著者によって「あなたがたは〜である ἦτε」に書き替えられていることに因るものである。そしてこの改変と共に、25節全体が著者の教会観を反映したものとなっている。

また21節もこのキリスト讃歌を採用した第一ペトロ書の著者によって、一部が改変されていると考えられる。21bには、キリストが「あなたがたのために ὑπὲρ ὑμῶν」苦しみを受けたとあるが、この讃歌は本来自分たちの共同体において一人称複数形で歌っていた讃歌である。そのことは特に救済理解に関わっている24節に示されている。24aでは、キリストが十字架にかかって、自らその身に「わたしたちの罪を τὰς ἀμαρτίας ἡμῶν」担ったと記されるように、この讃歌自身が教会共同体の信仰告白となっているのである。そのため第一ペトロ書の著者は一人称の箇所を著書に合うように二人称に変更しなければならなかったのである。この点から21節「あなたがたのために ὑπὲρ ὑμῶν」の句は、本来「わたしたちのために ὑπὲρ ἡμῶν」であったと考えられる。同様に、21aの「あなたがたが召された ἐκλήθητε」という二人称複数形の第一アオリストの受動態も本来ならば、「わたしたちが召された ἐκλήθημεν」と一人称複数形で、入信したことを回顧する導入部となっていたはずである。しかしながらこの改変にも関わらず、キリストの苦難がこの21節を特徴づけているのは確かであり、また救済理解と深く関わっていることからこの21節を本来の讃歌に含めることとする。

以上の検討からここでは、とりあえず2：21-24を「キリスト讃歌」と考える²⁷⁾。この讃歌が、前述したように第一ペトロ書の著者によって手を加えられていることは、第一ペトロ書の中心2：18-3：7まで続く、いわゆる「家庭道徳訓 Haustafel」²⁸⁾に挟まれる形で置かれていることと関連している。書簡などの勧告は、たいてい二人称で命令されるように、この讃歌も前後(21節と24節)の節に手を加えて、家庭道徳訓の文章との整合性を持たせようと試みているのである。

なおこの家庭道徳訓は、他の書簡の中にも散在しているものである。

(その他の例として、コロ3：18-4：1、エフェ5：22-6：9、一テモ2：8-15、5：3-8、6：1-2、テト2：2-10、3：1-2などがある²⁹⁾。)

そしてL. Goppeltは、この第一ペトロ書の道徳訓をコロ3：18-4：1、エフェ5：22-6：9と同じ伝承群に属するものであると考えた³⁰⁾。確かにこれらの家庭道徳訓には共通した

理解が見られるが、三書を比較すると以下ようになる。

勧告の相手	コロ	エフェ	Iペト
妻と夫	3 : 18-19	5 : 22-33	3 : 1-7
子どもたちと親	3 : 20-21	6 : 1-4	—
奴隷(召使い)と主人	3 : 22-4 : 1	6 : 5-9	2 : 18-25

コロサイ書とエフェソ書においては、妻と夫に対する勧告の後に、奴隷と主人に対する勧告が置かれているが、第一ペトロ書では反対になっている。特にコロサイ書の家庭道徳訓は、第一ペトロ書のものより古いこと³¹⁾から考えると、第一ペトロ書の著者はこの順序を入れ替えて用いたと考えられるが、その理由はこの讃歌の終りに後述することとする。またコロサイ書とエフェソ書には、子どもと親に対する勧告が2番目に置かれているが、第一ペトロ書の中には記されていない。このことは著者が必ずしも他の書簡などのように家庭道徳訓をそのまま用いたのではなく、キリスト讃歌同様に手を加え編集しているためであると考えられるが、このキリスト讃歌自身も、子どもと親の勧告のモチーフを持っている。それはコロ3 : 20とエフェ6 : 1の勧告に共通して見られる「両親に従いなさい。」という句は、このIペト2 : 21の「キリストの足跡に続くようにと、模範を残された。」という箇所によって親であるキリストの模範に倣う子どもであるキリスト者の姿を知ることに見られるからである³²⁾。ここにこの第一ペトロ書の家庭道徳訓のみが、その中にキリスト讃歌を持っている意味があるのではないか。2 : 18以下は、召し使いたちに対する勧告となっているが、この箇所に「キリストの模範(2 : 21)」に倣うようにと、キリスト讃歌が用いられているのである。この「模範 *ὑπογραμμός*」の聖書における用例は少なく、旧約統編のIIマカ2 : 28³³⁾と、新約聖書ではこの箇所のみである。またこの「模範」は、第一ペトロ書とはほぼ同時代に著された第一クレメンスやポリカルポスの手紙にもたびたび「キリストの模範」として用いられている³⁴⁾。これらの用例は「模範 *ὑπογραμμός*」が、当時のキリスト理解において、一般に用いられていたことを示している。しかしこの用語をキリスト讃歌が本来持っていたか、あるいは第一ペトロ書の著者が、付加した用語であるのかは意見の別れるところである³⁵⁾。しかし、このキリスト讃歌は本来家庭道徳訓とは無関係な、教会共同体の信仰告白文である。その中にあって「(キリストの)模範を残された」と歌うことは不自然でもあるが、キリストの模範に倣う目的でこの「模範」は讃歌に採用されたと考えられる。

なおこの書簡は、2 : 21-24のキリスト讃歌に続いて、妻と夫に対する戒めを置いている(3 : 1-7)。この戒めの箇所にはいわゆる結婚の秘義(カトリック教会の「秘跡 *mysteri-*

um) が述べられており、2:18以下の「家庭道徳訓」の続きと理解されている³⁶⁾。しかしながら家庭道徳訓という理解は、この3:1-7の箇所が保持している本来の教会儀礼的意味を失わせているように思われる。また前述したように、従来の家庭道徳訓の順序を入れ替えているのも、また3:1-7の妻と夫に対する戒めが、キリスト讃歌の救済理解のすぐ後に置かれているのも、決して偶然ではない。それは、初期の教会における秘義の順序に関連していると考えられるからである。この第一ペトロ書の著者は、教会での秘義の順序に従って置いているのである。その秘義の順序を最もよく伝えているのが、ナグ・ハマディ文書であるが、そのうち「フィリポ福音書」³⁷⁾には救済の後に結婚の秘義が「新婦の部屋」として記されている。

§68 主はあらゆる業を秘義の中で「行なっ」た。すなわち、洗礼と塗油と聖餐と「救済」と新婦の部屋（のことである。）

§76 [洗] 礼に復[活と]「救済」がある。その「救済」は新婦の部屋の中にある。

[] は原文への訳者の推定復元。

ここでいう新婦の部屋とはヴァレンティノス派に特有の神話論的儀礼であり、プレーローマ（充満）の内部で「キリスト」と聖霊、アカモート（ヴァレンティノス派の神話では過失を犯した「上のソフィア」から切り離されたエンテュメーシスの別称の一つで、「下のソフィア」）と *σωτήρ* (=救い主、プレーローマの星、第二のキリスト、イエス) がそれぞれ「対」関係を構成するのに倣って、地上の霊的な者たちもやがて来るべき終末においてソーテールの従者たる天使たち（花婿）に花嫁として結ばれる。ヴァレンティノス派はこの結婚を「新婦の部屋」と呼び、その地上的な「模像」として一つの儀礼行為を实践した³⁸⁾。いずれの箇所も「救済」が新婦の部屋-結婚の秘義と関連していることを示しており、第一ペトロ書における「救済」理解-結婚の秘義が教会の儀礼に倣って記されたことを示唆している³⁹⁾。このことは、第一ペトロ書の著者が、2:21-24のキリスト讃歌を、教会の儀礼に倣って順序立てて記す中で、ここに採用したことを意味しているのではないか。換言すれば、この讃歌は教会儀礼における「救済」を表現したものであると理解できる。この点でも、教会論的理解を述べる25節は、救済理解を示す24節までとは異なった理解を示し、むしろ牧会的配慮を示すこの著者の手になるものと考えてよいであろう。

なお「フィリポ福音書」は抜粋集であり、洗礼、聖餐、塗油、救済、新婦の部屋の五つの儀礼行為は、ヴァレンティノス派のものである⁴⁰⁾。また「フィリポ福音書」の成立は、ヴァレンティノス派の神話論がかなりの程度展開を遂げた時代、すなわち後二世紀後半以降と考えられる⁴¹⁾。このことから第一ペトロ書の秘義の順序が、ヴァレンティノス派ははじめ、二世紀における教会儀礼の順序に影響を与えたことを示していると考えられる。しかしながら第一ペトロ書にはグノーシス的なキリスト理解が述べられているわけではない。むしろキリストの苦難を述べるこのキリスト讃歌を採用することで、それらの要素を排除しようと考えたのではないか。

それは *σωτήρ* というキリスト称号を用いないことにも現れている。この第一ペトロ書とも関係のあるエフェソ書にはキリストが教会の体であり自らその体の救い主 *σωτήρ* (5:23) など、キリスト称号として採用されていたにも関わらず、一度もキリストに *σωτήρ* を用いないのは、グノーシス的なキリスト理解との混同を恐れてのことと考えられる。そしてこのキリスト讃歌は、それらグノーシス的なキリスト理解には希薄なキリスト理解=「苦難のキリスト」理解を、この第一ペトロ書に与えているのである。

Ⅳ 一ペトロ書3:18-22の「救済」について

この3章でも、2章のキリスト讃歌同様に、キリストの苦難が述べられている。しかし内容としては、より教会論的な発展段階をみることができる。この3:18-22の讃歌は初期教会におけるキリスト論的な信仰告白を形成している点で重要な讃歌となっている。またこの讃歌は、ミドラシエ的な表現を用いながら、救いに至る道を述べている点でも特徴的である。これはいわゆる「キリストの救いの道」⁴²⁾として知られている。このキリスト讃歌は、救済をテーマにした信仰告白としての洗礼式文を形成している独自のキリスト讃歌となっているのである。しかしこの讃歌の成立に関しては、不明な点も多く、また古くから第一ペトロ書の本文との繋がりの問題も指摘されてきた。すなわち、3:18bの *ἵνα* - 文(従属文)は主文の内容と必ずしも整合性を持っていないこと⁴³⁾、また3:19は関係接続詞の *ἐν* *φ*⁴⁴⁾で始まっているが、関係文を形成していないことなど、キリスト讃歌としては整ったものではない。それゆえこの讃歌を、R. Bultmannなどは、キリスト讃歌断片(3:18b, 22b)を繋ぎ合わせたものであると考へた⁴⁵⁾。しかし、これらは讃歌の断片(Fragment)ではなく、これら(3:18-22)は、おおむね一つのキリスト讃歌であるとする。その理由はこのキリスト讃歌が、キリストの受難(3:18a) - 死(3:18b) - 復活(3:21) - 昇天(3:22a) - 神の座(同)に言及し、一連のキリスト論を形成しているからであり、この讃歌自身が新約中でも、優れた信仰告白を形成しているからに他ならない。ここでは、この讃歌で述べられる救済理解について、検討していきたい。

この一ペトロ書の讃歌は、キリスト讃歌のうちで唯一「洗礼」に言及している讃歌であることが、特徴となっている。21節以下で示されるその洗礼までの道のりが18節以下に述べられることとなる。まず18節では、キリストの苦難を述べて、その苦難が「私たちを」(ここでも「あなたがたを」と二人称に書き換えられているが)神に導くためであると述べている。しかしキリストの苦難が2章の讃歌では「模範」であったのに対して、この3章の讃歌では、キリスト者を導く理由となっており、この二つの讃歌におけるキリストの苦難理解は、異なったものであることがわかる。そして18bには対句で、

「肉では *μὲν σαρκὶ* 死に渡され、

霊では *δὲ πνεύματι* 生きる者とされた」と述べられる。この対句は、極めてパウロ的であり、またキリスト讃歌以前に成立していた対句によっていると考えられる⁴⁶⁾。その対句はロマ1：3-4の定型句である。

「御子は、肉によれば *κατὰ σάρκα* ダビテの子孫から生まれ、

聖なる霊によれば *κατὰ πνεύματος ἀγιοσύνης*

死者の中から復活によって力ある神の子と定められたからです。」

この定型句は、続く5節の「わたしたちの主イエス・キリスト」という告白によって、明確に信仰告白として示されている。しかし他方この第一ペトロ書の讃歌においては、肉は死、苦難として表現されていて、パウロの定型句をそのまま用いたのではなく、この讃歌においてはキリストの苦難がテーマであることを述べていると考えられる。またこの讃歌のキリスト理解は、第一ペトロ書における死者に対する福音宣教の意義を「肉において裁かれて死んだようでも、神との関係で、霊において生きるようになるため」(4：6)と述べる根拠となっているのである。さらにこの3：18bの理解には、霊による救済が示されている。その霊は、19-20節では擬人化されており、キリストによって宣教され(19節)、ノアの時代には神に従わなかった者(20a)とされている。この霊は、今や救われるべき者として述べられているが、救いの表象として水が示され、その水による救いを示した(20：b)あと、21節は、洗礼を「水で前もって表された洗礼(3：21a)」と示して、それが「今や *ὡς* イエス・キリストの復活によってあなたがたを救う(3：21b)」と、救済論に結びつけて理解している⁴⁷⁾。この洗礼による救済理解はこのキリスト讃歌における救済理解の現実性を示していると同時に、この讃歌が洗礼時の信仰告白と関連することを示している⁴⁸⁾。

なお洗礼時の信仰告白と救済を明確に示すのは、ナグ・ハマディ文書のうち「三部の教え」という三部構成のヴァレンティノス派の教理体系を述べる書である。そのうち第三部にあたる終末論を述べる箇所に、洗礼と信仰告白が示されている。

127.30 この洗礼は、父なる神と御子と聖霊に(結ばれる)救いである。これら(三つ)の名前——35 これらはすなわち、福音の唯一の名前である——に対する信仰の告白が行なわれ、128 彼ら(万物)が自分たちに語られたこと——すなわち、彼ら(父なる神と御子と聖霊)が存在するという——を信じるならば⁴⁹⁾。

この「三部の教え」では、洗礼時に三位一体を信仰告白する者の救済が明確に述べられている。またこの救済理解には、この3：18-22のキリスト讃歌における洗礼式文としての救済観が用いられたと考えられる。

「天使(たち) *ἀγγελοι*、また権威、勢力はキリストの支配に服している。」(3：22b)と述べるこのキリスト讃歌の終句は、権威、勢力で天使の階級を示し⁵⁰⁾ これらをキリストが支

配することを述べることで、天におけるキリストの卓越性=顕現を明確にしているのである⁵¹⁾。この前提として、キリストは天に上り *πορευθεὶς*⁵²⁾、そこで「神の右(の座)に ἐν δεξιᾷ τοῦ θεοῦ 着いている ἐστίν (3:22a)」とエフェ1:20の讃歌と同様の句を用いて、キリストの昇天=キリストの顕現を示している。

しかしこの一ペトロ書のキリスト讃歌では「天に、上った(=上げられた) *πορευθεὶς*」と讃歌で多様されるアオリスト分詞⁵³⁾でキリストの昇天を過去のこととして述べ、「神の右に在る ἐστίν」と現在のこととしてキリストが神の座に着いていることを述べている。アオリスト分詞は、主に文章の主動詞(ここでは主文の *ἐστίν*)に先行する動作を示すことが多く、この讃歌でもキリストが天に上げられた(*πορευθεὶς*)後に、神の右に着いている(*ἐστίν*)と時間の経過を辿っていると考えられる。この一ペトロ書のキリスト讃歌においては、時間の経過も重要な意味を持っている。この讃歌はキリストの受難(3:18a) - 死(3:18b) - 復活(3:21) - 昇天(3:22a) - 神の座(同)を順次述べることで、「救いに至る道」を示そうと試みているのである。そしてこの讃歌のキリスト理解は、やがて初期の教会における信仰告白となっていく点でも、このキリスト讃歌は重要な位置を占めているのである。

なおキリスト讃歌の中でキリストの昇天に言及している讃歌は、この一ペトロ書と一テモテ3:16のみである⁵⁴⁾。特にこのペト3:22aはキリスト讃歌中で唯一、明確にキリストの「昇天」に言及している箇所である。そして天使の名を記すことで、キリスト顕現(昇天)における、天使による「昇天の証人」理解を明確に示している⁵⁵⁾。そしてこのキリストの昇天=キリスト顕現と考えるならば、かつて Bultmann が指摘した通り、1:20と3:18b, 22bが同じ讃歌の断片であるという理解も考えられるが、この3:18-22はキリスト論に関して、時間の経過を辿りつつまとめられた讃歌となっていて、キリストの受難-昇天(神の座)という、一つのキリスト論を形成しているのである。それゆえに1, 3章の讃歌が共にキリスト顕現を示しているとはいえ、表現も異なる両者を繋ぎ合わせて一つの讃歌とする彼の仮説を支持することは困難ではないか。

この3:18-22のキリスト讃歌は、洗礼における救済を述べる信仰告白文であると同時に、第一ペトロ書の宛先の諸教会に対して、現在の苦難を通して救いに至るという救いの道、救済論を提示する目的で採用されたのであろう⁵⁶⁾。

V. 結論

以上の検討から、この第一ペトロ書に採用された三つのキリスト讃歌は、その救済理解においてそれぞれの理解を示していることがわかる。1:20の讃歌は、キリスト顕現による救済理解を示し、また2:21-24の讃歌は、イエスの十字架の死による贖罪死=救済という理解を示

し、さらに3:18-22の讃歌においては、洗礼を受けることによってイエスの復活に与り、そのことによって救われるというきわめて教会論的な救済理解を示しているのである。換言すれば、これらの讃歌は、1章と3章の讃歌におけるキリストの顕現=救済という理解、また2章と3章の讃歌におけるキリストの苦難というある程度の共通性はあるにせよ、本来は別々のキリスト讃歌であることは確かである。またそれぞれの讃歌の成立年代も異なることも考えられる。特に、最後の3:18-22の讃歌は、キリスト讃歌の中でも最も、教会的な理解を示しており、小さいながら信仰告白を形成しつつあり、他の讃歌よりも後のものであることを窺わせている。このように内容もそして成立時期も異なっていると考えられる第一ペトロ書のキリスト讃歌であるがゆえに、Bultmann が述べていた、これら讃歌のうち1:20と3:18b, 22bが同じ讃歌であったとする仮説は否定されるであろう。またこれらキリスト讃歌には、キリストを救い主 *σωτήρ* と告白する箇所はないが、この点はグノーシス的な理解を避けてのことと考えられる。このことは第一ペトロ書の著者のキリスト理解とも重なり合うのではないか。第一ペトロ書の著者はこれら、いずれも救済理解を持ってはいるが、本来異なったこれら三つのキリスト讃歌を、巧みに自らの救済理解に取り込みつつ、独自の救済論を形成していったと考えられる。

注

本論文は第40回関西新約聖書学会（1999年6月14日 於 活水女子大学）における研究発表に、加筆・修正を加えたものである。

（なお神学関連文献の略語は基本的に、Schwertner, S., *Theologische Realenzyklopädie, Abkürzungsverzeichnis*, Berlin-New York: Walter de Gruyter, 1976. に拠っている。）

- 1) Deichgräber, R., *Gotteshymnus und Christushymnus in der frühen Christenheit*, Studien zur Umwelt des Neuen Testament (Abk. StUNT). 5, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1967, S.163. による。なおこのリストはロゴス讃歌等を加えて、一部修正している。なお [] 部分は讃歌には含まれない。
- 2) Goppelt, L., *Der erste Petrusbrief*, Kritisch-exegetischer Kommentar über das Neue Testament (Abk. KEK). XII/1, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978⁸, S.97f. cf. Schelkle, K.H., *σωτήρ* in *Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament* (Abk. EWNT). III, Stuttgart et al.: W. Kohlhammer, 1983, S.782.
- 3) 第二ペトロ書での用例は1:1, 11, 2:20, 3:2, 18である。また第二ペトロ書の成立年代は、二世紀半ばあたりまでが考えられているが、ここでは125年頃を考える。apud Paulsen, H., *Der zweite Petrusbrief und Judasbrief*, KEK. XII/2, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992, S.94.
- 4) Foerster, W. *σωτήρ, κτλ.* in *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament* (Abk. ThWNT). I,

Stuttgart: W. Kohlhammer, 1960, S.1018.

- 5) なおこのフィリ3:6-11のキリスト讃歌は、形式はパウロ的であるが、パウロ以前に遡る讃歌伝承と考えられる。cf. Müller, U.B., *Der Christushymnus Phil 2 6-11*, *Zeitschrift für die neutestamentliche Wissenschaft* (Abk. ZNW), 79, 1988, S.22 なお、フィリ3:20は新約においてキリストが σωτήρ と言われる最古のテキストであり (apud Schelkle, K. H. *idem.*)、フィリピ書には、キリスト=救い主、主という理解が顕著にみられる。
- 6) Bultmann, R., *Bekenntnis- und Liedfragmente im ersten Petrusbrief (1947)*, in: ders., *Exegetica* (hrsg. Dinkler, E.), Tübingen: J. C. B. Mohr, 1967, S.285ff.
- 7) この点は多くの研究者が指摘するところであるが、例えば Goppelt, L., *op.cit.*, S.49ff. では、第一ペトロ書とロマ書、第二パウロ書簡、さらに教会書簡、ヤコブ書との関係がそれぞれ比較検討されている。また第一ペトロ書における「パウロ主義」に関しては、Brox, N., *Der erste Petrusbrief*, *Evangelisch-katholischer Kommentar zum Neuen Testament* (Abk. EKK). XXI, Zürich/Neukirchen-Vluyn: Benziger/Neukirchener, 1979, S.47ff. Lindemann, A., *Paulus im ältesten Christentum*, Beiträge zur historischen Theologie (Abk. BHTh) 58, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1979, S.252ff. 等参照。
- 8) 例えば、Schelkle, K. H., *Die Petrusbriefe, der Judasbrief*, Herders Theologischer Kommentar zum Neuen Testament (Abk. HThK). XIII/2, Freiburg et al.: Herder, 1964³, S.110f. usw. 近年では、Frankemölle, H., *1. Petrusbrief, 2. Petrusbrief, Judasbrief*, Die Neue Echter Bibel (Abk. NEB). 18 u.20, Würzburg: Echter, 1990, S.38. もこの傾向にある。
- 9) Goppelt, L., *op.cit.*, S.121f.
- 10) 多くの研究者は1:20のみをキリスト讃歌 (あるいはキリスト讃歌の一部) としている。年代順に、Deichgräber, R., *op.cit.*, S.169. Goppelt, L., *op.cit.*, S.124f. Brox, N., *op.cit.*, S.79. Schutter, W.L., *Hermeneutic and Composition in I Peter*, *Wissenschaftliche Untersuchungen zum Neuen Testament* (Abk. WUNT). II/30, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1989, p.56. など。
- 11) κέσμος はこの「天地創造の前から (時の初めから) *πρὸ ἀπὸ καταβολῆς κόσμου*」の句において、しばしば無冠詞で用いられている。apud Blaß, F., Debrunner, A. u. Rehkopf, F., *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch* (Abk. BI-D, *Grammatik*), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1990¹⁷, § 253, Anm.6. 特に「先在のキリスト」は同じ句を用いて、エフェ1:4に示されているが、この「天地創造の前から」の句は本来詩編74:2に示されるようにイスラエルの救済に関する句であった。cf. Strack, H.L. u. Billerbeck, P., *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch III*, München: C.H. Beck, 1994⁹, S.579f.
- 12) προγινώσκω 「予め知る」の受動態・完了分詞、男性・単数・属格。なおこの1:20の用例を「予め選ばれた」とする解釈 (Louw, J.P. & Nida, E.A., *Greek-English Lexicon of the New Testament Based on Semantic Domains*, Vol.1, New York: United Bible Societies, 1989², p.335.) は、この箇所のキリスト論において、的確な理解とはいえない。
- 13) φανερώω 「現す」の受動態・第一アオリスト分詞、男性・単数・属格。
- 14) 例えばヘブ1:3の4連詩など (ただし1, 2連は現在分詞、また3連は韻を踏むため Hyperbata される。拙論「ヘブル書1章3節『キリスト讃歌』と知恵概念について—ソロモンの知恵からの影響」

- 基督教研究52巻 1990年 89ページ以下参照。)
- 15) ただ1:18の冒頭には、分詞 *εἰδότες* (*οἶδα* 「知る」の分詞、男性・複数・主格) が置かれている。
 - 16) BI-D, *op.cit.*, § 447, § 489, Anm.2. なお新約聖書の Parallellismus に関しては、拙論「Parallellismus—新約聖書の統語法について」関西外大・研究論集66 1997年 289ページ以下参照。
 - 17) 拙論 前掲書 291-295ページ参照。
 - 18) 多くの研究者は、後の付加と考えている。Deichgräber, R., *op.cit.*, S.169, Anm.4. Goppelt, L., *op.cit.*, S.126.
 - 19) 'apokalyptische Schemata' apud Goppelt, L., *op.cit.*, S.124.
 - 20) Deichgräber, R., *op.cit.*, S.170.
 - 21) この「過去—現在形式 das Einst-Jetzt-Schema」が、いわゆるパウロ書簡(牧会書簡も含む)以外で見られるのは、ヘブ12:26、言行録17:30と、このIペト1:14以下のみである。apud Lindemann, A., *Die Aufhebung der Zeit. Geschichtverständnis u. Eschatologie im Epheserbrief*, Studien zum Neuen Testament (Abk. StNT). 12, Gütersloh: Gütersloher, 1975, S.67.
 - 22) *κατενώπιον* が「~の面前で」の意味で用いられるのはセム語法である。コロ1:22、ユダ24など。Moulton, J.H., & Howard, W. F., *A Grammar of New Testament Greek II*, Edinburgh: T. & T. Clark, 1928/79, P.465.
 - 23) この新共同訳の「業」よりも、このエフェソ書1:10では神の「計画」と理解する。apud Lindemann, A., *op.cit.*, S.77. また *οἰκονόμος* は、神の恵みの「管理者」としてIペト4:10に複数形 *οἰκονόμοι* で用いられている。
 - 24) ders., *op.cit.*, S.68.
 - 25) H. Windisch, *Die katholischen Briefe*, Handbuch zum Neuen Testament (Abk. HNT). 15, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1930², S.65. Schelkle, K.H., *op.cit.*, S.110ff. 近年では、Osborne, T. P., *Guide Line for Christian Suffering: A Source-Critical and Theological Study of 1 Peter 2, 21-25*, *Biblica*. 64, 1983, p.383ff. など。
 - 26) イザヤ書 LXX のテキストは、Ziegler, J. (edidit), *Isaias. Septuaginta. Vetus Testamentum Graecum. XIV*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1983³. に拠っている。
 - 27) Goppelt, L., *op.cit.*, S.204. ではキリスト讃歌を2:22-24に限定している。
 - 28) Goppelt, L., *op.cit.*, S.165. Brox, N., *op.cit.*, S.125. 等は2:18以下を家庭道徳訓と考えるが、Osborne, T.P., *op.cit.*, p.382f. は2:11-3:12までを家庭道徳訓と考え、このキリスト讃歌もキリスト者奴隷に対する勧告を与える目的で著され、キリスト者の苦難をテーマと見ている。
 - 29) その他、一クレ1:3, 21:6-9, ポリ・イグ4:1-6:1. など。
 - 30) Goppelt, L., *op.cit.*, S.164.
 - 31) Goppelt, L., *idem*. では「家庭道徳訓」のより古い形式を、コロサイ書の中に見ようとしている。
 - 32) この理解の背景にはロマ4:13以下のアブラハムの模範があると考えられる。cf. Goppelt, L., *op.cit.*, S.126f.
 - 33) IIマカ2:28「事細かな著述は著者ヤソンに譲り、我々は要約を記すことに(=下書きすることに *τοῖς ὑπογραμμοῖς*) 徹しよう。」IIマカパイ記の記テキストは、Hanhart, R. (edidit), *Maccabaeo-*

- rum. Liber II, Septuaginta. Vetus Testamentum Graecum. IX/3, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1976². に拠っている。*
- 34) 一クレ16:17, 33; 8、ホリ手紙8:2など。apud Goppelt, L., *op.cit.*, S.201, Anm.16.
- 35) 例えば、Lohse, E., *Paränese und Kerygma im 1 Petersbrief, ZNW. 45, 1954, S.89* は、これを付加として考えている。
- 36) Goppelt, L., *op.cit.*, S.166. Brox, N., *op.cit.*, S.141.
- 37) 邦訳は、大貫隆訳「フィリポ福音書」『ナグ・ハマディ文書』II 福音書 岩波書店 1998年による。エプト語原典のテキストは、英語との対訳で、Layton, B., *The Gospel according to Philip, in Nag Hammadi Codex II, 2-7, NHS. XX, Leiden et al.,: E. J. Brill, 1989, p129-215* に収められている。
- 38) 前掲書、補注8-9ページ。その儀礼の具体的内容としては、最近の歴史的・批判的研究では「聖なる接吻」説と「臨終儀礼」説が有力である。(同9ページによる)
- 39) また「三部の教え」では、洗礼を「新婦の部屋」と呼んでおり、(128:35、邦訳は、大貫隆訳「三部の教え」前掲書による)、救済と洗礼との関連を示している。
- 40) 同上、332ページ。
- 41) 同上、342ページ。
- 42) 'Christi Heilsweg' apud Goppelt, L., *op.cit.*, S.239. Sanders, J. T., *The New Testament Christological Hymns, SNTS. MS, 16, Cambridge: Cambridge University Press, 1971, p.95f.*
- 43) Goppelt, L., *op.cit.*, S.241.
- 44) cf. Bl-D, *op.cit.*, § 219, Anm.2.
- 45) Bultmann, R., *idem. Deichgräber, op.cit.*, S.172f. Goppelt, L., *op.cit.*, S.229ff.
- 46) cf. Goppelt, L., *op.cit.*, S.244f.
- 47) 前述した一ペト2:22-24の讃歌では、キリストの受けた傷によっていやされた。(2:24) と受難を救済に結びつけて理解していた。
- 48) Goppelt, L., *op.cit.*, S.256f.
- 49) 邦訳は、大貫隆訳「三部の教え」前掲書による。
- 50) Schelkle, K. H., *op.cit.*, S.110. Goppelt, L., *op.cit.*, S.262.
- 51) Broer, I., *ἀγγελος in Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament (Abk. EWNT). I, Stuttgart: W. Kohlhammer, 1980, Sp.34. Lülsdorff, R., EKAEKTOI APTEAOI, Biblische Zeitschrift, Neue Folge (Abk. BZ. NF.) 36, 1992, S.104f.*
- 52) πορεύω 「行く、帰る」の受動態(第一アオリスト分詞、男性・単数・主格)。この一ペトの用例に近いのは言行録1:10 イエスが天に「行かれる πορευομένου(受動態、現在分詞、男性・単数・属格)」であり、「昇天物語 Himmelfahrterzählung」において受動態(あるいはデポネンティア)で用いられる。cf. Goppelt, L., *op.cit.*, S.263.
- 53) πορεύω 「行く、帰る」の受動態、第一アオリスト分詞、男性・単数・主格。
- 54) 高挙の例として、他にフィリ2:9a、エフェ1:20、ヘブ1:3dがあるが、これらには明確にキリストの「昇天」は述べられてはいない。
- 55) Goppelt, L., *op.cit.*, S.262, Anm.105.

- 56) 讃歌を含めた第一ペトロ書に関しては、Shimada, K., *Studies on First Peter*, Kyobunkwan, 1998. が詳細な研究書である。